The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	伊尹・兼通・兼家を取り巻く文壇の作品形成過程研究：『一条摂政御集』・『本院侍従集』・『蜻蛉日記』
Author(s)	堤, 和博
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44675
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【2】

氏　　名	堤（つつみ）　和（かず）　博（ひろ）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　１８８５５　号
学位授与年月日	平成 16 年３月 25 日
学位授与の要件	学位規則第４条第２項該当
学　位　論　文　名	**伊尹・兼通・兼家を取り巻く文壇の作品形成過程研究－『一条摂政御集』・『本院侍従集』・『蜻蛉日記』－**
論　文　審　査　委　員	（主査） 教　授　伊井　春樹 （副査） 教　授　後藤　昭雄　　助教授　荒木　　浩

論　文　内　容　の　要　旨

九条右大臣藤原師輔の子供の、伊尹、兼通、兼家の三兄弟は、それぞれ当時の文学の生成やその流布に、きわめて密接な関係を持っていたと考えられる人物たちである。伊尹にはその私歌集である『一条摂政御集』が存し、初めの四十一首は、みずからが卑官の「とよかげ」と称し、恋の歌を物語風に仕立てた内容となっている。兼通には、本院侍従との関係を物語のように展開した『本院侍従集』があり、兼家には結婚した道綱母による『蜻蛉日記』が生み出されており、とりわけ上巻の成立は兼家の関与がすでに指摘されている作品でもある。このように概観するだけでも、まさに彼らは『後撰集』の作風と共通する時代の存在であり、歌物語やその後の物語の隆盛に大きな位置を占めているといえるであろう。

本論は、その三人を中心とする文学作品と、文壇とも称すべき存在による作品の形成過程について論じたもので、400 字詰め原稿用紙に換算すると、およそ 660 枚余となる。全体は四章からなり、第一章「『一条摂政御集』「とよかげ」の部研究」として二節、第二章「『一条摂政御集』他撰部の歌語り的歌群研究」として四節、第三章は「『一条摂政御集』他撰部後半部研究」、第四章は『本院侍従集』研究」、第五章は『蜻蛉日記』研究」として四節からなる。これらの考察を通じて、三兄弟が単独に作品形成にかかわるのではなく、相互に関連しながら、また時代の文学的雰囲気の中で作品が生み出されていったこと、そこに文壇的な存在を認めようとするのが申請者の基本の姿勢であるといえよう。

自らが「とよかげ」と名のる、歌物語的な四十一首は、内容から二部（A 部、B 部）に分かれ、統一した作品ではなく、性質が異なることを、詳細に論じていく。A 部にはテーマが設定され、趣向の凝らされた歌群に対して、B 部はそのような傾向が見られなく、未定稿であった可能性があるとする。また、『一条摂政御集』の「とよかげ」以降の他撰部においては、伊尹周辺で歌語りが創作されたこと、本院侍従と兼通との関係を意識していることなどを明らかにしていく。

『本院侍従集』では、従来兼通の周辺で物語化されたかとしていた説を退け、むしろ兼通を貶める内容であるとし、編者は本院侍従側にあり、背景には政治的な意図があったかとする。『蜻蛉日記』では、上巻の引歌表現を取り上げ、それは独自な形式であり、たんなる古歌の引用にとどまるのではなく、詠歌の事情までも身の上に重ねた、「引歌語り表現」ないしは「引歌物語表現」であったという。兼忠女の物語的に展開する養女譚についても、初めに兼家の提案があり、それを実施する段階で日記からその事実を削除したとの新しい解釈を示す。このように、三人の兄弟によ

って生み出された作品の背後に、それぞれ文学を醸成していく場や人物相互の関係を明らかにしていったのが、本論文の主要なテーマであった。

論文審査の結果の要旨

『源氏物語』が成立する以前の文学史における状況は、『後撰集』が撰集され、『伊勢物語』や『大和物語』などといった歌物語が生み出されるなど、和歌と物語との融合した作品が輩出した時代でもあった。そのような時代的な背景もあって、私家集においても、『伊勢集』や『一条摂政御集』『本院侍従集』などに代表される、きわめて物語化された作品が編纂されることになる。その中心をなすのが、政界の中枢にいながら、風流を好み、和歌を多数残した伊尹や兼通、兼家の兄弟たちであり、現代的な意味ではない、文学集団が周辺に存在し、そのもとにこれらの作品が形成されていったとする、文学史を視野に見据えた論文となっている。

『蜻蛉日記』には長い研究史が存し、注釈書も豊富ながら、論の中心となる『一条摂政御集』や『本院侍従集』はその点では本文の考察とともに、研究も十分になされているわけではなく、読解にゆれもあり、立論には困難がともなう。それを詳細に読み取り、分析し、物語化された「とよかげ」は二部に分かれ、後半は未定稿であり、それ以後の他撰部においても、小野好古女やその一家が作品形成に関与していることなどを明らかにする。伊尹の周辺に存在したかとする歌語集団の存在、『本院侍従集』は虚構によって兼通をモデルにしながら、政治的に貶めようとする意図のもとに作成されたなど、新しい問題の提起をする。道綱母の養女引き取りに関しても、日付けの矛盾などを指摘しながら、その展開を興味深く推論していく。

ただ、この時代の作品解釈には、ほかに資料が存在しないだけに、大胆な資料の解釈と推論が必要であるとはいえ、部分的には説得力に欠ける憾みも存し、なお一層の考証が必要であろう。ただ、これまでやや閉塞的であったこの分野の研究領域に、新しい視点から論じ、文学史的な展開をしたことは、学界に裨益する点は大きい。これによって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。